

「金色の海藻が売れ、おかげで、つぎの研究をする費用ができた。さっそく、それにとりかかろう。こんどは、金のウロコを持つ魚を作りあげよう。海底でふえた金の海藻を食べ、育てる魚。そして、すばしこく泳ぎ、大きくなったら戻ってくるような性質の魚だ。海のミツバチとでも呼ぶべきものだ。このほうが、もっとすばらしいではないか」

盗んだ書類

静かな夜ふけ。エフ博士の研究所のそばに、ひとりの男がひそんでいた。その男は、泥棒だった。

エフ博士はこれまでに、すばらしい薬をつぎつぎと発明してきた。まもなく、また新しい薬を完成するらしいとのうわさだった。男はその秘密を早いところ盗み出し、よそに売りとはそうという計画をたてたのだ。

男は窓から、そっとのぞきこんだ。なかではエフ博士がひとり、むちゅうになって薬をまぜあわせている。熱中しすぎて、のぞかれていることに気がつかない。

やがて、少量の薬ができあがった。みどり色をした液体だった。博士はそれを飲み、大きくうなずいた。

「うむ、味は悪くない。においも、これでいいだろう……」
そして、のびをしながらつぶやいた。

「やれやれ、やっとできた。いままでにわたしは、いろいろな薬を作った。しかし、この薬にまさる薬はあるまい。世界的な大発明だ。さて、忘れないうちに、製造法を書きとめておくとしよう」

博士は紙に書き、それをへやのすみの金庫のなかに、大事そうにしまいこんだ。それから、自分の家へと帰っていった。

待ちかまえていた男は、仕事にとりかかった。注意して窓をこじあげ、なかにしのびこむ。さっき博士がやった通りに金庫のダイヤルの番号を合わせると、簡単にあけることができた。男は書類をポケットに入れ、うれしそうに足どりで逃げ出した。

「しめしめ、これでひともうけできるぞ。博士が飲んだところをみると、人体に害のないことはたしかだ。それに、すごい薬とか言っていた。だが、どんなききめがあるのだろうか……」

その点が、なぞだった。飲んだあと博士がどうなったのか、調べるひまはなかった。電話をかけて聞くわけにもいかない。しかし、エフ博士の発明だから、いままでの例からみて、役に立つ薬であることはあきらかだ。

かくれ家に引きあげた男は、紙に書いてある製法に従って、薬を作ってみることにした。どんな作用があるのか知っていないと、ひとに売りつける時に困るのだ。



原料を集め、フラスコやビーカーも買いととのえた。そして、何日かかかって、問題の薬ができあがった。スズランのような、いいにおいがする。

男はそれを自分で飲んでみた。すがすがしい味がした。男はイスに腰をかけ、ききめがあらわれるのを待った。

そのうち、男は立ちあがり、そとへ出た。急ぎ足で歩きつづけ、ついたところはエフ博士の研究所だった。

「先生。申しわけないことをしました。このあいだ、ここの金庫から書類を盗んでいったのは、わたしです。わたしをつかまえ、警察へつき出して下さい」

と男は言った。それを迎えた博士は念を押した。

「本当にあなたなのですか」

「そうです。書いてある通りにやって薬を作り、それを飲んでみました。そうすると、自分のしたことが悪かったのに気づき、ここへやってきたのです。お許し下さい。盗んだ書類は、おかせします」

男は涙を流してあやまった。だが、エフ博士は怒ろうともせず、にっこり笑いながら言った。

「それはそれは。やはり、わたしの発明はききめがあった。この薬は、良心をめざめ

させる作用を持ったものです。ところが、作ってはみたものの、あとで困ったことに気がついた。実験のために、進んで飲んでみようとという悪人がいないのです。しかし、あなたのおかげで、作用のたしかさが証明できたというわけです。どうも、ごくろうさまでした」